

マーガレットの開花特性について

佐藤義機

この実験は従来のマーガレット栽培から脱皮し、ビニール・ハウス利用による3~4月の安定した切花生産ができる技術を確認するための一手段として、さし穂を1~3°Cで20日間、40日間低温処理したのち、異なった日長並びに温度条件下で栽培し、開花の状態を比較検討した。

1. 摘芯後における発生分枝数はさし穂の低温処理期間が短いほど、また長日より短日条件下で多かった。一株当りの発生分枝数は小豆島在来白花種よりも伊豆大輪白花種で多い傾向がみられた。

2. 小豆島在来白花種の茎長はさし穂を低温処理しない無加温、短日条件下でもよく伸長した。逆に加温、長日条件下ではブラインドの発生が多く茎長の伸長が停止した。伊豆大輪白花種の茎長はさし穂を十分に低温処理したのち、加温、長日条件下で栽培したほうがよく伸長した。

3. 着花節位は両品種とも長日より短日条件下で低下する傾向を示した。

4. 小豆島在来白花種の開花は加温の有無にかかわらず、短日条件下で促進された。伊豆大輪白花種の開花は加温、長日条件下で促進された。このように両品種間では開花を誘起するための栽培条件がかなり異なることを認知した。